野外展示の
平城宮朱雀門組物模型

はじめに　平城宮の正門である朱雀門は1998年に復原が完成し、一般公開されている。いまでは平城宮のシンボルとして訪れる人々に親しまれている。

平城宮跡資料館の中庭に、平城宮朱雀門組物の原寸模型を展示している。この模型は、もともと朱雀門復原事業に際しての復原研究の一環として1980年度に製作したものを展示物として野外に設置したものである。

この模型の展示の意図は、復原が完成すると、人の目の位置からはるかに高く、細部をとらえにくい柱上の組物を、実物大模型で、より間近かに見ていただこうという点にある。朱雀門復原が完成した現在も展示中である。

模型の製作と野外設置　この模型は、朱雀門を構成する部材のうち、柱・頭貫・大斗・肘木・巻斗・丸桁を組み合わせたものである。ただし、朱雀門で使用される最も典型的な部材を組み合わせたものであって、実際に設計した朱雀門の一部を復原したものではない。

資料館の中庭に設置するにあたっては、90cm四方のコンクリート基礎（銅板被覆）上に柱（直径68cm）の上部70cm分を立て、柱頂部に頭貫を大入れにして十字に通し、柱上に大斗を置き、大斗上で肘木・巻斗を十字に組んで丸桁を受けた。なお、頭貫と大斗、肘木と巻斗は丸ダボで固定した。

この模型の用材には集成材を使用した。内部の芯材としては、良質の米松板材を乾燥のうえ圧着したものを使用し、レゾルシノール樹脂を接着剤にしている。その外側に外粧材として台湾産桧の赤身材をエポキシ樹脂で貼り付け、鉋仕上げとした。野外展示に際して部材表面には赤色の、木口には黄色の塗装を施した。

この模型の大きさは、模型最上部の丸桁一辺長が2.4m、全体の高さは、約２mである。

なお、本模型の製作方法の詳細と、集成材としての強度など各種の試験、検討の結果については、「平城宮跡建造物復原にともなう材料工法の調査」『奈良国立文化財研究所年報1980』や、「朱雀門復原に際しての材料の検討」『平城宮朱雀門の復原的研究』（奈良国立文化財研究所学報第53冊）、1994年、を参照されたい。

おわりに　この模型の頭貫側面に取り付けた「平城宮朱雀門斗栱模型」の解説文を再録しておく（解説文中の朱雀門復原図は省略）。

「**平城宮朱雀門斗栱模型**　朱雀門は平城宮の南辺中央に建っていた宮の正門です。発掘調査やその他の資料によって図のように復原できます。この模型は、軒を支える斗栱の一部を実際の大きさで作ったもので、これによって当時の朱雀門がいかに大きくて立派な建物であったかがわかります。」

（千田剛道）

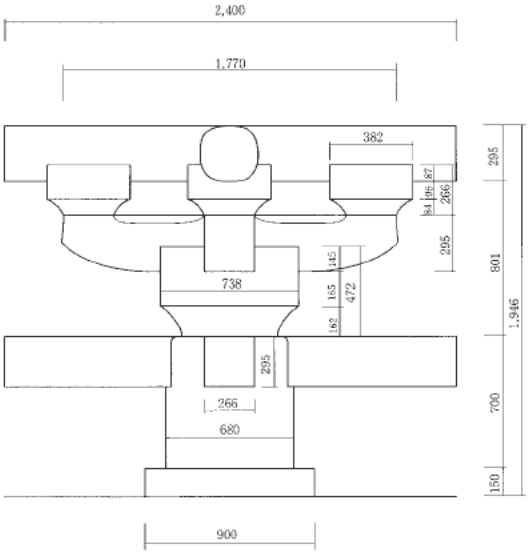

図102　朱雀門組物模型　１：40

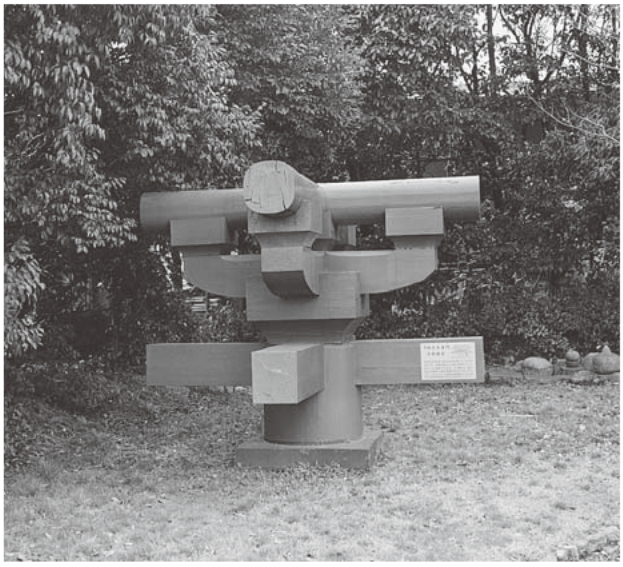

図103　朱雀門組物模型（平城宮跡資料館中庭に展示）